－所蔵作品紹介－

上野　憲男　UENO Norio

白いフィルド

しろいふぃるど

作品データはこちら

「私の育った北海道の、雪の降る前の、どうしようもない空の色に、少年時代からひかれてきて・・・・・・。それをこんどはトータルなものとして出してみたかった。」

上野憲男という抽象画家を語るときにいつも引き合いに出される一節である。この、どうしようもないという言葉からは、北国のどんよりとした鉛色の空をながめて精神的に鬱屈していくような気持ちが感じられる一方で飽和点にまで達した雲から、いまにも雪がはらはらと降り出さんとするぎりぎりの瞬間を表現しているとも感じられる。冬の雲が、雪という冬の華へと変貌するのは自然の営みによる生成であるが、上野憲男の作品もまた、そうした茫漠とした混沌の世界から、ひとつの形象物が生み出されていくぎりぎりの瞬間をとらえたもののように見えてくる。たれこめた青と白と灰色の無形の世界から有形の像がぽつり、ぽつり、ぷつ、ぷつとあらわれてくるような、そんな世界である。

旭川美術館だより「氷華」No.７．８合併号（1985.３発行）「収蔵作品から」より